かざぐるま

小川未明

青空文庫

駅前の広場で、二人の女はとなりあって、その日の新聞を、ゆき来の人に売っていました。一人は、もう年をとった母親であったが、一人は、まだ若い、赤ん坊をおぶった女でありました。

朝のうちは、電車のつくたび、乗り降りするものがはげしいので、新聞もよく売れたが、正午近くなると、買うものが、あまりなかったのです。

冬の日は、広場の土を白々とてらしていました。ただ、紙くずが、風にふかれて、その上をとんでいます。二人は、なにを考えているのか、ぼんやりと、前の方をながめていました。

すぐ向こう筋に中華料理店があって、さっきから、入り口のドアが、あいたり、しまったりしていました。そして、いましがた、桃色の服をきた女と、背の高い、黒服の男が、手をとりあって、入ったように思ったのが、いつのまにか時間がたち、もう食事をすまして、二人が出てくるのを、年とった女は見たのでした。かの女は、「うちのむすこは、まだこんな上等のところを知らないだろう。」と、思いました。

それは、母親にとって、うれしいことであり、また、かわいそうなことであるような気がしました。

ゆうべのこと、むすこは、工場からかえると、やぶれた仕事服のポケットをさぐり、金をとり出して、

「おかあさん、映画を、見にいっていらっしゃい、お正月だもの。」と、前へ差し出したのでした。

そのよごれた手を見るうち、ふと幼いころ、おまえの手はだれに似て、まるくて、かわいらしいのだろうと、よくいったことが、記憶にうかんだのです。そしてその手がいま私たちの暮らしを立てていると思うと、泣かずにいられませんでした。

「いまごろ、むすこは工場で、はたらいているだろう。」と、遠くの煙突から、白い煙の上るのを見て、かの女は思いました。

「このごろ、ご主人は、どうなの。」と、わかい女に聞きました。

赤ちゃんの父親は、病気でねていました。

あくる日、年とったほうの女は、デパートの、かざられた衣裳の前に立っていました。そこには、三万円の札のついた帯地、また二万円の札のさがった晴れ着が、かかっていました。

「だれが、これを買うのだろうか。私も、となりの若い女も、一生身につけることはないだろう。」

そう思うと、なんとなく、さびしい気がして、かの女は、おもちゃのある売り場へいそいだのでした。そして、そこで、むすこが映画を見ろといってくれた金で、となりの赤ちゃんがよろこびそうな、赤いかざぐるまを買いました。

かの女は、それを大事そうにもって、階段を下り外へ出ました。つめたい風に、セルロイドのかざぐるまは、さらさらと、かわいた音をたてて、まわるのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社
　1954（昭和29）年6月
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2019年3月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かざぐるま

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/